優秀賞

— 大学・一般の部 —

「“十角館の殺人”の魅力について」

坂田陽和さん

推　し　本：『十角館の殺人』
　　著　　：綾辻行人
推したい相手：普段読書をしない人、ミステリに馴染みが無い人

「“十角館の殺人”の魅力について」　坂田陽和

私が推したい本は、“十角館の殺人”である。この本は、タイトルからもわかる通り、凄惨でショッキングな事件が巻き起こる。また、私の読書に対する価値観を大きく変えた、という意味でもショックが大きく印象深い一冊である。まず、純粋にこの物語の面白さを伝えたい。舞台は孤島。そして、島に建てられた奇抜な建物、十角館。さらに、十角館を建てた建築家・中村青司は、以前この島に住んでおり、十角館とは別の建物の中で不可解な死を遂げている。そんな、ミステリにおあつらえ向きな舞台に、大学のミステリ研究会に所属している七人が訪れる。これで事件が起きなかったら嘘である。フィクションなので嘘ではあるが。また、島での連続殺人とは別に本土では中村青司にまつわる奇妙な出来事が巻き起こる。島だけでなく、本土でも連続殺人の鍵を握る出来事が登場人物たちを翻弄するのだから面白い。十角館の中で身近に犯人がいるという恐怖と闘いながら、現場に残された手がかりや、状況などから“ハウダニット（どのように犯行に及んだか）”を基盤に推理を進めていくパート。中村青司の周囲から少しずつ事件に迫り、“ホワイダニット（どうして犯行に及んだか）”を基盤に推理を進めていくパート。この二つが同時に楽しめ、全く別の発端から一つの真実が明かされる様は、見事としか言いようがない。また、じわじわと被害者が増えていく連続殺人に、確実に憔悴していく十角内部の描写が緻密で、人間らしさや、リアルな人間心理によって一連の事件に対する没入感がぐんぐんと高まっていく。そして、真実にたどり着いた時の慌ててページを戻してしまいたくなる感情を私は忘れることができない。それは、特大の驚愕と、爽快感。少しの悔しさである。ここで言う悔しさとは前述した私の読書に対する価値観に密接に関係している。私は、この本を読むまではライトノベルや漫画などで、作者から与えられた物語を一方的に受け取るだけの読書が多かった。そんな私に、十角館を訪れるミステリ研の一人、エラリイの物語上での第一声となる言葉は、深く突き刺さった。「僕にとって推理小説とはあくまでも知的な遊びの一つなんだ。小説という形式を使った読者対名探偵の、あるいは読者対作者の、刺激的な論理の

遊び。それ以上でもそれ以下でもない」- 十角館の殺人より引用 - 作者の物語に乗っかって、ただ踊らされていた私の読み方とはまるで違ったその考えと、何とも知的な言い回しに、初めてこの本を読んだ私はこの一文だけで“推し文大賞”に応募しようと思ったものである。登場人物と一緒に事件の成り行きに一喜一憂し、結末まで駆け抜けるのではなく、登場人物とは全く異なる視点、いわゆる神視点から、名探偵よりも早く結末までたどり着こう、という読み方は私にとって斬新そのものだった。この思想が冒頭で書かれたからには、作者の綾辻行人に挑戦状を叩き付けられたに等しい。加えて、名探偵は島での情報と、本土での情報の片方しか得られない。しかし、読者である我々には両方の情報が提示される。これが遊びであり、そこにハンデが与えられたのならば、勝たねばならないだろう。登場人物より早く犯人を導き出す。それも論理的に。緻密に描写される人間ドラマや想像力をかきたてる情景描写に舌鼓を打ちながら、客観的に事件の真相を推理する。一度で二度おいしいというよりは、一度に二種類のおいしさが押し寄せてくる感覚は一度体験したら忘れられない。また、エラリイの台詞の直後には、ミステリのテーマに関する話題もあがる。それも大変に知見に富んだ会話な為、本作がミステリに馴染みが無い人の指南書になることは間違いない。もっとも、読書への臨み方など人によって異なり、そこに優劣など存在しない。しかし私がこの一文に影響を受けたこともまた、事実であり、影響を受けた一人として、読書に興味が持てない、ミステリに馴染みが無い、という人に本書を推すばかりである。さて、エラリイの台詞を軸にこの十角館の殺人を推してきた。では、私は、読者対名探偵、読者対作者の知的な遊びに勝利することができたのか。私如きが看破できるような陳腐なトリックだったのか。ここに、前述の読後の悔しさという感情に繋がっているのである。しかし、その悔しさは決して不快なものではない。むしろ、清々しさに満ちている。それは、作者の考えたトリックがただひたすらに見事であり、鮮やかなものだったことに起因していることは言うまでもない。たった一行が世界を変える。そんな謳い文句を一度は目にしたことがあるだろう。この言葉は、本書の為にあると私は思う。作中の世界も、私の読書に対する価値観も一行で変えられたのだから。